様式６　別紙

未来に繋がる笑顔で子育て事業３

事 業 主 体　名称：NPO 法人　ママほっとサロン
住所：和気郡和気町尺所２０８－１
事業実施場所　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」、和気町中央公民館

～事業を始めるにあたって～

新型コロナ感染予防対策の為、親子は家庭内で親密な愛着関係を作ることができているが、子どもの育ちに必要な他者とのかかわりである社会からは隔絶されていた。すまいるひろばのような小社会の中で子どもは、子どもの育ちに必要なソーシャルスキルを獲得できるのである。新型コロナ感染予防対策が緩和され、再び子どもはソーシャルスキルを獲得する機会が得られ、親は閉塞感のある子育てから解放される。そういう場面で「今日はどこに行こうかなと考えた時、すまいるひろばに行こうと思った。」との利用者の声があり、すまいるひろばが、選択される居場所となりつつあることが嬉しく感じた。これまで外出できなくても、Facebook ですまいるひろばの情報を見ていたとのことで、SNS からの情報が自宅で過ごす親子へ繋がっていることを感じた。

令和２年６月２６日のあかちゃん向けのプログラムでは、すまいるひろばに初参加の親子がおり、「勇気を出して参加し、他のママの話が聞けて良かった。また来たい。」と感想があった。すまいるひろばのような子育ての拠点が必要であり、そこからの情報発信が、子育て中の母親に元気や勇気をもたらすことが分かった。

本年度は、和気町地域子育て支援拠点事業の委託は得られなかったが、やはり、当団体が大切にしてきた親子へのかかわりや居心地のいい温かな雰囲気は、すまいるひろばならではのものであり、この事業を継続維持するには、ボランティア活動では不可能である。

よって、和気町地域子育て支援拠点事業の受託を懇願し、自分たちは支援の質を上げるための努力を惜しまず、地域ぐるみの子育て支援や子育て支援者の質の向上が必要であることを町民や行政に理解していただけるよう働きかけることが必要である。

その為に、世代間交流や相互理解を図ることを目的としたすまいる講座の実施、新聞部を設立し新聞を通じて地域ぐるみの子育て支援の必要性を伝え、子育てを後押ししてくださる地域住民を増やしたい。また、子育て支援者のネットワークづくりと、子育てを支える意識を高めるための実践の場を提供したい。

～事業実施内容～

ネットワークづくり学習会

＜第１回＞

①事　業　名　すまいる講座
②参 加 人 数　祖父母世代０名、親子６組（保護者６名、子ども７名）
③日　　時　令和２年１０月２２日（木）
④場　　所　和気町中央公民館
⑤内　　容　講師：畑上歯科（畑上雄大医師、幡基　泉歯科衛生士）
内容：「赤ちゃんと子どもの歯のお話」を歯科医と歯科衛生士に講話していただ

いた。

⑥活動の成果等

・生後２か月から２歳の子どもと母親が参加した。事前に講師に聞いてみたいことをアンケート調査し、講師とそれを共有し、講師はそれを基に講座内容を設定してくださった。熱心にメモを取りながら聴講する参加者の姿があった。講師より母親だけでなく父親や祖父母の理解や協力を得られることが必要である。また、虫歯予防を母親だけに任せるのは大きな負担となる為、家族みんなで取り組めることが大切である。その為、今後は祖父母世代も取り込んだ歯のお話ができるといいのではないかと助言をいただいた。

＜第２回＞

①事　業　名　　すまいる講座

②参 加 人 数　　祖父母世代１名、親子４組（保護者４名、子ども５名）

③日　　時　　令和２年１１月１３日（金）

④場　　所　　和気町中央公民館

⑤内　　容　　講師：古野　透さん

内容：「お正月のおかざりづくり」を講師に教わった。

⑥活動の成果等

・毎年お世話になっている講師の方を招き、４組の親子や地域の方と一緒に作った。昨年まではリング型のお飾りだったが、今年はバージョンアップしてメガネ型に挑戦した。リング型は右まわりだったが、メガネ型は左右両方に均等に藁をよるのがとても難しく、参加者は、「頭では理解できてるんだけどなぁ」と悪戦苦闘されていた。毎年、お飾り作り用に準備していただいている藁は、穂が着く前に稲を刈り、真夏の暑い時期に３日間天日干しをしてしっかり乾燥させた後、緑色を保つように大切に保管してくださっていることを講師の先生に教えていただき、お飾りになるまでにたくさんの工程があることを知ることができた。

・初めて参加された地域の方は、子育て中の親子の中で「場違いなところに来てしまった。」と言われていたが、講座が終わる頃には、生後半年のあかちゃんのママに「ちょっと抱っこさせて

もらってもいい？」と話しかけ優しく抱っこしてくださっている姿が印象的でした。すまいる講座は、子育て中のママと地域の方が出会える場です。どんどん地域の方にも参加してもらいたい。

・子どもたちは、偶然みんな１歳児でスタッフや地域のボランティアさんと後半は外へ遊びに出かけることもできた。参加者から、「おかげで集中して、お飾り作りに取り組めた。」との感想があった。

ネットワークづくり学習会

＜第１回＞

①事　業　名　　第１回Ｒ１学習会

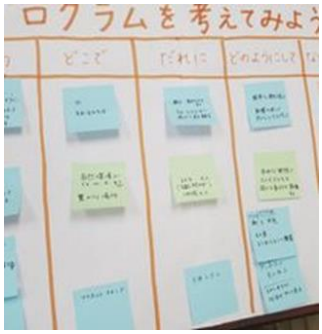
②参 加 人 数　　祖父母世代４名、親子２組（保護者２名、子ども２名）

③日　　時　　令和２年９月１８日（金）

④場　　所　　地域：子育て交流拠点「すまいるひろば」

⑤内　　容　　講師：杉本洋子

内容：前年度の振り返りと子育て支援者としての資質について学んだ。



⑥活動の成果等

・前半は、昨年の子育て支援養成講座の振り返りをし、支援者の役割を再確認した。後半は、それを踏まえた上で、企画を考えた。　参加者の企画力は素晴らしかった。

・あかちゃんや子どもたちの遊びが充実し、保護者同士が繋がれる楽しい企画を考えている。大声で笑うことや体を少し動かすことも必要であり、外の空間で、のんびりと子どもの遊びを見守れることも大切である。保護者が笑顔で楽しむ姿は、子どもに安心感と喜びを与える。そんな企画になることを期待する。

＜第２回＞

①事　業　名　　第２回Ｒ１学習会

②参 加 人 数　　祖父母世代６名、親子２組（保護者２名、子ども２名）

③日　　時　　令和２年１０月１６日（金）

④場　　所　　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」

⑤内　　容　　講師：杉本洋子

内容：11/20 のＲ１ネットワーク企画「親子で秋を楽しもう！」の役割分担と子育て支援者としての資質について学んだ。

⑥活動の成果等

・地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」から「子どもの遊びと環境づくり」と「親との関係性」について学んだ。前回と今回の学びの中から支援者として自分が意識したいことをピックアップし、支援者として意識しながら 11/20 の実践することにした。また、前回企画したものを更に具体化し役割分担や進行について共有した。Ｒ１ネットワークを築く上で、お互いの動きを見ながらチームワークよく助け合うことが必要であることを学んだ。

・11/20 の実践日に向けて、各自で１か月間かけて準備することとし企画力や救援力を養う。

＜第３回＞

①事　業　名　　第３回Ｒ１学習会

②参 加 人 数　　祖父母世代４名、親子２組（保護者２名、子ども２名）

③日　　時　　令和２年１２月２５日（金）

④場　　所　　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」

⑤内　　容　　講師：杉本洋子

内容：11/20 のＲ１ネットワーク企画「親子で秋を楽しもう！」の振り返りと今後の課題を考えた。

⑥活動の成果等

振り返りとして、何か企画する時には、

①支援者としての役割

②運営する上での役割

③チームとしての役割

を意識しながらそこにいることを学んだ。

②運営する上での役割を振り返りでは、

❶参加者把握と全体共有

❷物的環境の把握

❸配置の全体共有

❹急変に対応する余力
❺シュミレーションが大事
❻ワンチーム！

以上６項目が事業をする上で大事なポイントとして見えてきた。

・最後にＲ１ネットワーク結成の意思確認を行い、子育て応援団のステッカーを配布した。

・今日の振り返りを元に親子向けの企画をしてみたいという感想があり、既に前に向いている方もおられました。

・今後は、Ｒ１ネットワークを通じて、地域の子育て支援者として学びを深めたり、子育て支援活動について協力し合えたり、近況報告し合えたりする関係作りをしていく。

＜第４回＞

①事　業　名　　Ｒ１実践企画
②参加人数　　祖父母世代４名、親子１０組（保護者１０名、子ども１３名）
③日　　時　　令和２年１１月２０日（金）
④場　　所　　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」
⑤内　　容　　講師：杉本洋子
内容：「親子で秋を楽しもう！」をＲ１学習会の参加者が企画し親子が楽しむ企画を子育て支援者として考えて実践する。

⑥活動の成果等

・「居心地のいい空間で子どもは、興味関心を大切にし、五感を使って遊び込める。大人は、他者との触れ合いを楽しみ繋がりを広げる」ことを目的に、Ｒ１ネットワークのメンバーで、この企画に向けて準備してきた。あかちゃんから親子で楽しめる企画として、ミニゲーム：「お船に乗せて、お母さんゴー！」遊びのコーナー：「お城を探検しよう」「手作りやじろべえ」「どんぐりコロリン」「ライオン玉入れ」「ままごとコーナー」を設けた。子どもさんが土のお山から何度も滑り降りたり、どんぐりを探しに出かけたり。ママさんが遊びに夢中になっていたり、ママさん同士ゆっくりおしゃべりしたり。ぽけっとぱーくに穏やかな時間が流れていました。

・各コーナーでは、子どものいろんな「やってみたい」を引き出す仕掛けが施されていて、子どもさんたちのしっかり遊びこめている姿が見られました。自分で遊びを見つけ、五感を生かしながら、外遊びならではの新たな発見や喜びに出会えたのではないかと思う。歩き出したばかりのあかちゃんが、自分の足で興味関心の赴くまま、今までとは違う視点で外遊びをしている姿がたくましく、印象的だった。参加した保護者からは、「いつもとは違う遊びの中で子どもの成長を感じられた」「こんな遊びを家でもしようと思う」「ぽけっとぱーくで、こんなに遊べるなんて！」などの感想が聞かれた。コロナ渦で閉塞感のある日々だが、地域ぐるみの子育て、子どもの遊びこめる環境の大切さをあらためて感じた。親子の笑顔が、Ｒ１ネッワークのメンバーの元気の源

になった。

情報発信　**会議名：新聞部**

＜第１回＞

①参加人数　２人

参加者：幼児の保護者

②日時　令和２年８月１７日（金）

③場所　自宅

④内容　ラインの動画にて第１回部会開催

⑤活動の成果等　ラインでの動画ミーティングで開催した。8/24 の入稿に向け（９月の創刊号発行)、広報誌の修正箇所、写真掲載の承諾確認など、担当者が確認することを明確化した。入稿までの日程を確認した。

＜第２回＞

①参加人数　３人

参加者：幼児とその保護者

②日時　令和２年１０月２日（金）

③場所　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」

④内容　第２回部会開催

⑤活動の成果等

・９月に創刊号を発行した振り返りを中心に、次号(２月)に発行向けて、作業工程のスケジュールや役割分担、内容について打ち合わせました。初めて広報誌作りを行い、学びや課題は沢山あった。

①校正の回数が多く編集作業をすることへの負担軽減する為にチェックリストを作成し１ページ毎にみんなで丁寧に見直す。

②校正は５回までにする。

③発行までの計画を部員で共有し期限を守る。

④最終回以降の微細な訂正については、次号の課題とする。

⑤データの送付はできれば圧縮してからにする。

・今後の広報誌発行に向けてのチェックリストや振り返りの内容は、私たちにとって形としては見えにくいですが大きな成果を得た。

・次回の部会、12/4 に向けて、部員はそれまでに各自の役割を進めていく。

＜第３回＞

①参加人数　２人

参加者：幼児とその保護者

②日時　令和２年１２月４日（金）

③場所　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」

④内容　第３回部会開催

⑤活動の成果等

・広報誌「も～っと！ママほっと」の第２号を発行する準備をした。創刊号作成時の振り返りを

生かし、広報誌のチェック項目表を作成していたので、それを元に各担当が作成した記事や写真の確認、レイアウトを部員で細かく見直した。フォントの種類、文字サイズ、スペース幅、読点、表現、地図などを見直し、修正をすることになった。
・この作業を今月３回程度繰り返し、１月入稿、２月配布を目指す。
・広報誌作成にあたり、
①広報紙のレイアウトやデザイン
②写真撮影や掲載時のポイント
③文章作成
について、今後学びが必要と部員からの意見が出た。

＜第４回＞
①参加人数　３人
参加者：幼児とその保護者
②日時　令和３年１月２２日（金）
③場所　地域子育て交流拠点「すまいるひろば」
④内容　第４回部会開催
⑤活動の成果等
・「もっ～と！ママほっと通信」第２号作成後の振り返りや次年度の予定などを話した。
[振り返りの内容]
よかったこと・成果
❶校正チェックリストを作成したので、チェック項目を確認しやすかった。
❷創刊号のフォーマットがあったので、そのまま使用でき前回より作業効率が上がった。
❸校正のスパンを決めて見直しをしたことで、編集作業者の負担軽減に繋がった。
地域との繋がり
❶広報誌への写真掲載許可をとる時に、ママほっとサロンの活動を卒業している保護者へ連絡を取り、懐かしさや繋がりがあることへの喜びを伝えてもらうことができ、団体として存在している意義を感じられた。
❷1 人ずつではあるが、地域の方へのインタビューを続けることで、地域の方のことを理解したり、子育て世代へ伝えていく役割を広報誌作成に当たり担っていること再認識した。
❸町内同じ地域のママではなく、別の地域のママへもインタビューできるとよい。
❹広報誌の手折り作業を手伝ってくださるボランティア「折り姫さん」を募集し手伝っていただき、地域のボランティアさん同士の顔が繋がった。
今後に生かすこと
❶校正チェックリストへ掲載写真に写っている人の掲載許可の確認、引用文献の言葉や漢字の確認、文字サイズの統一を上げる。
❷人物の写真は、背景ができるだけ無地で、室内で撮影する。
❸部員間でのデータのやり取りがスムーズにできる方法を取る。
その他
❶地域の方へのインタビューを広報わけや当団体 Facebook で呼びかけたが自ら手を挙げる方がおられなかった。

❷「子育て豆知識」のコーナーで、読者が求めている情報を知りたい。
❸広報誌のデザイン、伝わりやすい文章の作成、写真撮影と掲載方法について学びたい。
などが挙がった。
・創刊号を作成した時の振り返りが生かされていることが何よりの成果だと思った。
・今後は、目の前の課題解決に向けて部員みんなで取り組んでいく。

～事業を終えて～
〇事業実施による効果
＜事業の効果＞
１）事業参加者
①子ども
Ｒ１ネットワークのメンバーが「親子で秋を楽しもう！」を企画実施した際、子どもが土山から何度も滑り降りたり、どんぐりを探しに出かけたりした。大きい子が小さい子にどんぐりころがしの順番を譲る姿があった。子どもたちのしっかり遊びこめている姿が見られた。自分で遊びを見つけ五感を生かし外遊びならではの新たな発見や喜びに出会えた。歩き出したばかりのあかちゃんが、自分の足で興味関心の赴くまま、今までとは違う視点で外遊びをしている姿がたくましく、印象的だった。
母親が遊びに夢中になっていたり、母親同士ゆっくりおしゃべりしたり穏やかな時間が流れ、親子にとって安心感のある居場所となっていた。
参加した母親からは、「日常とは違う遊びの中で子どもの成長を感じられた」「こんな遊びを家でもしようと思う」「ぽけっとぱーくで、こんなに遊べるなんて！」などの感想が聞かれた。
コロナ渦で閉塞感のある日々だが、地域ぐるみの子育て、子どもが遊びこめる環境の大切さを再確認することができた。親子の笑顔が、Ｒ１ネットワークのメンバーの元気の源になった。
このような世代間交流のある小社会の中でソーシャルスキルやソーシャルインクルージョン、養護性を身に付ける機会となった。また、遊びを通じて、家庭では経験することのない、見たり、聞いたり、触ったりやり取りをする原体験により、子どもの心と体の健全な育ちが促されていた。
②保護者等
すまいる講座の「あかちゃんと子どもの歯のお話」では、熱心にメモを取りながら聴講する母親の姿があった。「お正月のおかざりづくり」では、１歳児の子どもたちがスタッフと外へ遊びに出かけることもできた。参加者から、「おかげで集中してお飾り作りに取り組めた。」との感想があった。託児ではなく日々の継続した自然な関わりの中で構築された関係から、母親が安心して他者に我が子を委ねる関係づくりができていると感じた。
講師が、毎年、お飾り作り用に準備している藁は、お飾りになるまでに沢山の苦労と工程があることを講話してくださった。この講座の為の地域住民である講師の温かな気持ちを参加者が知る機会となり講師への感謝の思いを抱いていた。
この事業により、母親は、子育てを見守る温かな雰囲気を受け取り、互いに支え合える空間で安心して子育てをすることができる。一人の子育てから仲間のいる子育てへと視野が広がり、お互いに支え合いながら子育てしていくことへ繋がりつつあることが分かった。
２）事業実施者
新聞部では、広報誌づくりに興味のあるメンバーを募り、４名の部員で始めたところ、１名が引

越しの為抜け、マンパワーが不足することを懸念したが、残った部員３名でチームワークを固め第２号まで発行することができた。部員は、創刊号作成時には互いの力量が分からない、関係づくりができていない状況であったが、第２号作成時には、互いへの信頼関係を構築し創刊号作成時の反省をフルに生かしスムーズに活動できた。

広報誌への写真掲載許可をとる時に、ママほっとサロンの活動を卒業している母親へ連絡を取った。懐かしさや繋がりがあることへの喜びの声をいただき、団体として存在している意義を感じられた。

本事業期間に３名ではあるが、地域の方へのインタビューをすることで地域の方のことや思いを理解することができた。その思いを子育て世代へ伝えていく役割を広報誌作成に当たり担っていること再認識した。

３名の利用者インタビューからは、当団体が運営する「すまいるひろば」の活動に勇気を出して足を運んだことから、次も参加したいという思いに気持ちが移行していることや、ひろばを利用する参加者スタッフ、ボランティアさんと信頼関係を構築しながら、自分の居場所として利用していることを生の声で聴くことができた。当団体として、そのような思いを聴くことで、これまでの活動が利用者にとって有効なものであったと確認できた。そういう母親の思いを大切に受け止め、初めて参加する方への配慮を含め、支援者としてのかかわりを見直す機会となった。

「すまいるひろば」を利用したことがない親子へ広報誌を届けることで、地域の方や利用者の思いや団体の活動を知ってもらい一人の子育てから仲間のいる子育ての輪を広げるためには、今後も継続性をもって発行していくことが必要となる。

子育て応援団のステッカーや完成した広報誌を渡した際、インタビューした地域の方から、当団体の活動の大意を理解した上で、活動を応援するという言葉をいただいた。このことから、まちを挙げて子どもの育ちと親の子育てを支える地域ぐるみの子育て支援の第一歩を踏み出せつつあると感じた。

３）地域等への効果

すまいる講座の「お正月のおかざりづくり」に初めて参加された地域の方は、子育て中の親子の中で「場違いなところに来てしまった。」と言われていたが、講座が終わる頃には、生後半年のあかちゃんのママに「ちょっと抱っこさせてもらってもいい？」と話しかけ優しく抱っこしてくださっている姿があり地域の方が親子の中に自然に馴染んでいく様子がうかがえた。

Ｒ１学習会では、地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」から支援者としてのコンピテンシーについて学び、R1ネットワーク企画「親子で秋を楽しもう！」を通じて、支援者としての自分を振り返ることができた。お互いの動きを見ながらチームワークよく助け合うことが必要であることを学んだ。また、振り返りを生かし、これからも親子向けの企画をしてみたいという感想があり既に前に向いている方もおられました。今後は、Ｒ１ネットワークを通じて、地域の子育て支援者として学びを深めたり、子育て支援活動について協力し合えたり、近況報告し合えたりする関係作りをしていく。

Ｒ１学習会全過程終了後、子育て応援団ステッカーを６名の方に配布し、Ｒ１ネットワークを結成することができた。

広報誌作成に当たり、地域の方へのインタビューを和気町商工会への協力要請をしたり、広報わけ掲載や当団体Facebookで呼びかけたりしたが、自ら手を挙げる方がおられなかった。当団体がピンポイントでインタビューを依頼する形やご紹介いただく形を取ったが、継続性を考える場合、認

知度を高める必要があると考える。
　広報誌の手折り作業を手伝ってくださるボランティア「折り姫さん」を募集し、手伝ってもらうことで地域のボランティア同士の顔が繋がった。
　広報誌は、和気町健康福祉課の協力を得て、町内３歳未満児を育てる家庭へ配布できた。その他では和気町商工会、和気町図書館、和気町中央公民館、和気町教育委員会、和気町子育てふれあいセンター本荘放課後児童クラブ、平病院、こまざわ小児科、瀬戸町万富公民館、備前市わくわくるーむ、当団体会員、寄付者へ配布した。（創刊号330部、第2号330部）
　上記、ネットワークづくり事業を実施することで、地域住民が子どもの育ちと親の子育ての支え手になるだけではなく、そこに興味を持ち意識を向け、身を置くことで、自己効力感や自己肯定感を持ちつつあった。
　この事業で、子ども、保護者、スタッフ、地域住民が繋がっていき、信頼関係を構築し支え合う場面が見受けられた。今後は、それぞれが、自分は、このまちの大切な一員であることを自覚でき自信が持てたり、地域ぐるみの子育て支援によるソーシャルキャピタルを高められたりして、人にやさしいまちづくりができるよう継続的な活動が必要となる。
〇今後の課題・展開
　すまいる講座「あかちゃんと子どもの歯のお話」の講師より、歯の健康を守る為には、母親だけでなく父親や祖父母の理解や協力を得られることが必要である。また、虫歯予防を母親だけに任せるのは大きな負担となる為、家族みんなで取り組めることが大切である。その為、今後は祖父母世代も取り込んだ歯のお話ができるといいのではないかと助言をいただいた。地域ぐるみの子育て支援に意識を向けて活動してきたが、家族ぐるみの子育て支援も視野に入れておく必要を感じた。
　新聞部の広報誌作成に当たり、「子育て豆知識」のコーナーで読者が求めている情報を知りたい。」「広報誌のデザイン、伝わりやすい文章の作成、写真撮影と掲載方法について学びたい。」と部員からの意見があり、広報誌作成に向けてのアンケート調査や研修を行っていく必要がある。また、地域の方や利用者インタビューについては、継続的に募集をかけ積極的の手を挙げてもらえるよう認知度を高めていく工夫が必要と考える。
　Ｒ１ネットワークが結成でき、今後、みんなで学びたいことについてアンケートを取った所、「感覚統合について学びたい。」という意見があった。乳児期からの支援を考える上では、感覚統合について学ぶことは必須であると感じ、今後は、感覚統合について学ぶ機会を作っていこうと思う。さらに、Ｒ１ネットワークでは、保育士、幼稚園教諭、里親、議員、子育て支援員、子育てボランティア、助産師と、いろいろな立場の方がメンバーとなっており知識や経験を生かして、子どもの育ちを軸に社会的な課題解決に向けての取り組みが出来るのではないかと考える。メンバーそれぞれが感じている社会的な課題について話し合う場を設けていきたい。
〇まとめ
　地域ぐるみの子育て支援や子育て支援者の質の向上が必要であることを町民や行政に理解していただけるよう働きかける為に、支援の質を上げるための努力を惜しまず、本事業を実施してきた。世代間交流や相互理解を図ることを目的とした「すまいる講座」を実施した。新聞部を設立し広報誌「も～っと！ママほっと通信」を通じて地域ぐるみの子育て支援の必要性を伝えた。子育てを後押ししてくださる「子育て応援団」が13名（Ｒ１ネットワーク6名、地域の方インタビュー3名、すまいる講座講師3名、新聞部部員1名）となった。子育てを支える意識を高めるための実践の場を提供し、子育て支援者のネットワークである「Ｒ１ネットワーク」を結成できた。